

*VESTIGIA, IMAGINES, VERBA*

*Semiotics and Logic in Medieval Theological Texts(XIIIth-XVIIth Century)*

ed. by Costantino Marmo

Brepols, Bologna, 1997, pp.463

関 沢 和 泉

Costantino Marmo によって編集されたこの論集は、1994年の5月の終わりに、イタリアはサン・マリノで開催されたシンポジウムの記録である。タイトルにすぐに見てとられるように、12世紀から14世紀にいたる神学の展開の文脈における記号理論と論理学の使用、そして、逆に神学上での議論が記号理論の発展に与えた影響に関する論考が22本収録されている。しかし、Marmo自身は、この主題が、サン・マリノ大学附属の国際記号・認知科学研究所の後援によって行われるシンポジウムには当初、必ずしも適切なものだとは思えなかったと告白している。だが、シンポジウムの進行とともに、彼はこの主題の選択が適切なものだと思えるようになったと次いで述べているが、その言が単なる編者の形式的な言葉ではなく現実に説得力を持つものであることは本文を読めば明らかである。

現在のこの分野における最前線が収録されていると言って良いだろうこの論集では、Abaelard, Thomas Aquinas, Roger Bacon, William Ockhamと言った光り輝く大御所達の名前はそれとしては取り上げられない。Marmoは、彼らに関してはすでに十分に言及されているのだから、と述べ、むしろそうした現在名の通った人たちの議論の背景となっている議論の文脈を構成することこそが興味深いのだと言う。この論集は、まさにそうした前景に浮かんだかたちで論じられてきた人物達の、背景をなしている様々な要素を検証する未だ進行途上の研究の現場からの報告である（なお、Ockhamを直接論じたものがない——Thijssenの論文はOckham自身でなく、Ockham派にかんするものである——のに対し、Duns Scotusを中心に扱った論考は、五本も含まれていることは注記しておこう）。

この書物には現在のこの研究分野における主要な研究者達の名前が連なっているが、彼らの論考は対象とする時代に応じておおよそ時代順に配列されている。それら収録論文は以下のようなタイトルを有している。

1. Jean Jolivet, Platonisme et sémantique, de Bernard de Chartres aux Porcétiens
2. Iwakuma Yukio, Enuntiabilia in twelfth-century logic and theology
3. Luisa Valente, Iustus et misericors. L'usage théologique des notions de significatio et connotatio dans la seconde moitié du XIIe siècle
4. Costantino Marmo, Inferential signs and Simon of Tournai's general theory of signification
5. C.H. Kneepkens, Please don't call me Peter: I am an enuntiabile, not a thing. A note on the enuntiabile and the proper noun
6. Mary Sirridge, The wailing of orphans, the cooing of doves, and the groans of the sick: the influence of Augustine's theory of language on some theories of the interjection
7. Silvana Vecchio, Mensonge, simulation, dissimulation. Primauté de l'intention et ambiguïté du langage dans la théologie morale du bas Moyen Age
8. Angel D'Ors, Insolubilia in some medieval theological texts
9. Alain de Libera - Irène Rosier-Catach, L'analyse scotiste de la formule de la consécration eucharistique
10. Allan Bäck, Reduplicative propositions in the theology of John Duns Scotus
11. Lauge O. Nielsen, Signification, likeness, and causality. The sacraments as signs by divine imposition in John Duns Scotus, Durand of St. Pourçain, and Peter Auriol
12. Christopher J. Martin, Impossible positio as the foundation of metaphysics or, logic on the scotist plan?
13. Simo Knuutila, Positio impossibilis in medieval discussions of Trinity
14. E. Jennifer Ashworth, Analogy and equivocation in Thomas Sutton, O.P.
15. Russel L. Friedman, Conceiving and modifying reality: some modist roots of Peter Auriol's theory of concept formation

16. Claude Panaccio, Angel's talk, mental language, and the transparency of the mind
17. Dominik Perler, Crathorn on mental language
18. Lambert M. de Rijk, Guiral Ot(Giraldus Odonis)O.F.M(1273-1349): his view of statemental being in his commentary on the Sentences
19. Johannes M.M.H. Thijssen, The crisis over ockhamist hermeneutic and its semantic background: the methodological significance of the censure of december 29, 1340
20. Joël Biard, La science divine entre signification et vision chez Grégoire de Rimini
21. E. P. Bos, Deus est. A scotistic discussion of Deus est as a self-evident proposition
22. Paul J.J.M.Bakker, Hoc est corpus meum. L'analyse de la formule de consecration chez des théologiens du XVe et XVIe siècles

多方面に渡る論考であり、個別に紹介する紙面はないので、いささか恣意的ながら二つの論考を選び出してコメントしたい。

(6)の Sirridge の論文はこの分野においてアウグスティヌスが与えた記号の本性に関する記述の改めて語るまでもない重要性をまず述べているが、そうしたアウグスティヌスの考察が、思弁文法学の確立に重要な寄与をなした偽 Kilwardby の文法理論にどのような影響を与えているかを、間投詞の分析をめぐるかたちで、その差異と共に分析している。これはその他の様態論者たち modistae になると、文法理論のテクニカルな話題の前に背景に退いてしまうことも多い基礎理論の問題を明らかにしている点で重要である。なお間投詞という扱いにくい問題は、中世の言語理論において、さまざまな人々において見解のかなり異なる問題であり、この点については、Pinborg の論考（1961, Interjektion und Natualaute, in *Classica et Mediaevalia* 23, pp. 115-38）が重要であるが、この Sirridge の論文でタイトルに反して十分に語られていない動物達の記号論にかんしては、この論集の編者である Marmo らが 1989 “On animal language in the medieval classification of signs” in *On the Medieval Theory of Signs*, Amsterdam, John Benjamins において行っている分析が明晰な見通しを与えているので参照されたい。

(19)は、主に哲学・神学的なテキストを対象としているその他の論文とは、その分析の視点が多少異なっているにも関わらず、それに反してこの論集の要点を突いたテーマを扱っている点で面白い。この論考は、1340年にパリ大学の人文学部で出された規約が *auctoritas* の読解に基礎を置いていた当時の大学的な知の形態に与えた影響を分析している。オッカム派の人々が、テキストを作者の意図から切り離して、テキスト自体の内在的構造から分析しようとしていたことに対して、1340年の規約は、テキストは作者の意図に基礎付けられるべきものであることを主張する。ここではテキストを読むことと、読むことが学問的・政治的・社会的に持つ意味についての関係が、具体的な規約とその対象とされたテキストの捻じれた関係の分析を通して示されていて一読に値する。

この書物が様々な個別の事象を通じて明らかにするのは、*auctoritas* の読解に基礎を置いていた、この時代の知の形式こそがまさに、言語が何をどのように意味するかを分析する議論を必要とし、記号の理論を発展させたという事実である。そして、そうした *auctoritas* の最たるものである、かの書物、聖書を巡る読解の歴史が、記号と意味をめぐるこの数世紀の理論の豊穡な展開に本質的な場所を、発展の原動力となる刺激を与えていたという事実である。22本の必ずしも広く知られていない人たちの扱う論文集ともなれば、歴史の落ち穂拾いのよせ集めといったものが想像されてしまうかもしれないが、この書は、様々なアングルから、中世を通じた記号理論の発展が他にも様々な文化的層の絡み合いとして成立していたことを興味深く示唆してくれる一冊である。

---